

「多様性」を叫ぶことの問題

——とくに、日本の教育において——

檜 垣 良 成

「多文化主義〔Multikulti〕は失敗した」と、かつてドイツのアンゲラ・メルケル首相は発言した¹。この発言の真意を突き詰める気はないが、この発言が示唆する内容の一部に、国内に異質な文化をもつ移民の流入を許容しながら、彼らをいわば放置し、彼らが社会に溶け込んだり、社会が彼らを受け入れたりするための努力をうまく機能させられなかったという事態が含まれていることは確かであろう。同様の事態は、かつて理想的な多文化社会と言われてきたオランダにも見いだされるであろう。もちろん、だからといって力づくでの文化統合が望ましいと筆者が思っているわけではない。ただ、「寛容」や「自由」といった言葉が示唆する「放置」、「不干渉」の問題にもっと敏感であるべきだと言いたいのである。

この問題は特にわが国の教育において既に深刻な問題を惹き起こしつつあるように思われる。「多様性」を尊重することに反対しているかのような印象を与えるタイトルを本稿に付したが、もちろん多様性を尊重すること自体に反対であるわけではない。ただ、或る意味で唯一の真理とでも言えるようなものを大事にする——そのためには、現代においては「放置」、「不干渉」では済まされず、建設的な対立が不可避である——ことなしには真に多様性を尊重することもできないという最近見失われがちな真実を再認識するために、あえて挑戦的なタイトルを付したのである。

1 「価値観の多様性」を教育することは自殺を奨励することか？

筆者は、わが国における相対「主義」を助長する教育の問題について数回にわたって論じてきたが²、それらの文章を読んだある卒業生から、以下のような示唆をもらった。すなわち、「それぞれで価値観を持っていんだよ」という教育は、「〔たった一つの〕真理に対する対等な権利と責任」を前提としない場合、その教育の「個人の自由」を標榜する表の顔とは裏腹に、現代においては、「先生や周囲が顔を曇らせないこと（その時その場の権威に認めてもらうこと）こそが正しい」という「正解信仰」を惹き起こしてしまう（なぜなら、「正義に対立するのは悪ではなく別の正義である」から、人それぞれの正義が対立する場合、より権威がある方、より利益が大きい方が正しくなるから）。それは結局、弱肉強食という自然法則に従うことを推奨していることになり、それゆえ、そう教育された者は、ひたすら周囲からの承認を求めることになる、とこれまでの議論をまとめた上で、

一
八
八

¹ 2010年10月16日の発言。2004年にも同様の発言をしている。

² 拙稿「対話と真理 教育とモラルの復興のために」、「トラシュマコスの呪縛「正解」信仰の深層」（筑波大学人文社会科学部研究科哲学・思想専攻『哲学・思想論集』第40、44号、2015、2019年）。

正解信仰を突き詰めると、権威から逃れ、承認欲求から逃れ、「自由になる」ためには、死しかないという発想が不可避ではないか、と問題を提起してくれたのである。

もちろん、人間には自分可愛さがあるし、死ぬのは怖いから、大抵の人はここまで考えを突き詰めず、権威・利益への従属と自分の欲求の充足とのバランスがある程度とればよしとし、「人は自由であり、何ものにも従属しない」という価値については、あまり深く考えず、自分の欲求が表立って抑圧されなければよしとして生きていくことになるのだろう。しかし、「それぞれで価値観を持っていいんだよ」という教育を「あなた個人が何ものにも隷属しない自由をもつ」という意味で真に受けた人は、逃げではなく、理想の実現のために死を積極的に選択してもおかしくはない。否むしろ、何ものにも隷属しない自由を文字通りの意味に受け取るかぎり、自由の実現のために現実にとりうる選択肢はそれぐらいしかないのではないだろうか。「それぞれで価値観を持っていい」の意味、そして「自由」の意味を現代の教育が提起していると思われるような意味で受け取るかぎり、卒業生の指摘は、まことに正鵠を射たもののように思えたのである。

そこで学生たちにこの指摘はもっともだと思うかどうか問いかけてみた。

現代日本の「多様な価値観」教育が自殺に結びつくものであるという意見は、もっともであるように思う。多様な価値観を容認するということは、各人の価値観はそれぞれに固有の価値を持っているため自分の価値観を持ち続けてもよいという意味と、各人の価値観はそれぞれに固有の価値を持っているため自分の価値観を相手に押し付けべきではないという意味で理解される。現代日本の「多様な価値観」教育は、唯一の真理の存在と「真理に対する対等な権利と責任」を前提としていない。つまり、各人の価値観以上に価値を持つものは存在しない。私の価値観は「私の」価値観であり、それ以上でもそれ以下でもない。そのため、自分の意見を持ち続けるのは勝手だが、それを保障してくれるものは何もないよ、という状況になる。異なる価値観が対立した時には、広い意味で「より力のある」ものが正しいものとして認められることになる。何の保証も承認もなしに自分の価値観を持ち続けることは容易ではないだろう。真理に対する権利を想定できないならば、周囲の人間からの承認を求めるとするのは自然なことであるように思う。そして承認を受けるためには、世の中の流れに敏感に反応し、周囲の人間のご機嫌を伺い、時に自らの価値観を押し殺して生きることが必要になる。それは「正解信仰」に従うということであり、集団の「空気」を読み「和」を乱さないようにするということである。人は生きている限り「承認」への欲求から逃れることはできないだろう。だとすれば、承認地獄に気づきそれに耐えられなくなってしまった人間は、もはや死ぬしかないということになる。人を死に追い込んでしまうような教育がまっとうなものであるとは思えない。多様な価値観を認めるということは聞こえのいいものだが、実現するのは容易ではない。「それぞれで価値観を持っていいんだよ」と言いながら、そのための場を用意しないのは、無責任であると思う³。

〔異なる価値観の〕尊重とは何か。多くの子供は否定してはいけないという意味で捉

³ 2019年7月9日「哲学特講」に対する学生Y.S.のリアクションより。なお、引用文中の傍点は引用者による。

えるのではないだろうか。そして価値観のことを、正しさへの解釈ではなく、生い立ちに基づいた各々のスタンスのように捉えているのではないだろうか。だから時折「自分の考え方が正しいとは思っていないが、これが私の価値観だから干渉しないでほしい」というような閉鎖的な言葉を耳にする。……価値観は異なっていて当然という教えをもとに、他者との対話を拒むニュアンスを持つ。この時点で、価値観は根拠のないそれぞれの主観でしかなくなる。心の内で悶々と考えることは許されても、それに従って他者に影響を及ぼすことは（社会的に良しとされている言動と合致していない限り）許されない。個人の行動基準が価値観ではなく、権力になる。「承認」を得ていることが自分が間違いではないという根拠になる。承認を得ることを諦めることは、存在・意思を否定されることにつながる。「異なる価値観」が尊重されるのは無害なときだけだ。承認を正しさの根拠にして生活してきた人にとって他者からの評価は、哲学における吟味するための一意見より、覆しようがなく重いものである。もし多数派や権威のある人物から非人道的だと言われたら、本人も自分が非人道的ではないことを証明できない。異常だと言われたら、いくら最適な言動を心がけていても、異常なのかもしれないと自ら疑わずにはいられないのである。そんな切迫した状況の中で、権力や承認欲求から逃れることを絶望的に感じるのも無理はないと思う。この仕組みは社会のコミュニティから孤立や自殺の要因となり得る。現代日本の「多様な価値観」教育が自殺を促すという主張は間違いではないと感じる⁴。

特定の宗教を信仰していたり、特殊な共同体の価値を自明視している人が、その信仰や価値観の故に迫害されている場面で、価値観の「多様性」を説くことはマイノリティを救うことにもつながるだろう。マイノリティとは異なる価値観を強く信じている人々に、その価値観を相対化してみることを促すからである。しかし、わが国においては、そもそも損得や生活の安寧を超えたレベルで強く信仰している価値があり、それが社会で対立して問題が生じているという状況はそれほど見いだされないように思われる。学生時代に西洋哲学を学び始めた頃に、グレゴリー・クラークという日本在住の学者の講演をテレビで見て、はっとしたことがある。彼は日本人を高く評価していたが、そのポイントは日本人には思想がないという点である。欧米であれば、寮で同室になっても宗教が違えばほとんど話もせず交流はないが、日本ではいったん打ち解ければ、私がどのような宗教を信じていようが関係なく、赤提灯にも連れていってくれるし、共に生活するということを重視してくれる。これは思想に対するこだわりがないからだ、というのである。こうした特徴は東洋でもめずらしく、日本人が世界で誇ってよい側面だという主旨のことを彼は言っていたと思う。思想や哲学がないという点を評価されるとは、当時、哲学を学び始めたばかりの筆者の心境は複雑であったが、西洋かぶれでそれまで日本の集団のあり方について否定的な思いを抱くばかりだった筆者のものの見方をこの講演が相対化してくれて生きやすくなったのを覚えている。もちろん、単純に一般化はできないが、総じてわが国においては、思想や哲学は個人の趣味のようなものであり、現実生活とはかかわりがなく、価値観が対立

⁴ 2019年7月9日「哲学特講」に対する学生H. N. のリアクションより。引用文中の〔 〕内の補いは引用者による。

して著しい社会問題が台頭している現状は見いだされにくいのではないだろうか（対立する以前に黙殺されていることはある）。

そうした社会で今のような仕方ですべて「価値観の多様性」を説くことがどういう効果をもたらすかを学生たちは語ってくれているように思う。彼らは（そして、彼らを導いた教師たちも）、すみわけが可能な趣味や嗜好のレベルでの価値観と、皆で共有せざるをえない社会的・道徳的とも言うべき価値観との区別に敏感ではない。後者の類の価値観について真に多様性を認めることが自分にいかに負担を強いるかということに自覚がない。元々、趣味や嗜好を越えたレベルでのリアルな価値観の対立に盲目的であったところに、単に観念的に「価値観の多様性」が説かれることによって、「それぞれで価値観を持ていい」というメッセージは、趣味や嗜好の多様性、ないしは自分の心のうちで何であれ思うことが保証されるという意味に変換されて受け取られているようなのである。そうであるから、「価値観の違いをそっとしておき、触らずにおくこと」が尊重のあり方として納得を与えることになる。

価値観の多様性を説くことは、若い人たちには特に否定一般の禁止として浸透している。何らかの考え方や価値観に対して、疑問を抱いたり、異論を提示したりすることはすべてよくないことだという意識を植えつけられていっているのである。少なくとも、そうした疑問や異論を公表してはならないのであって、自分のうちにとどめておかねばならない。

「それぞれで価値観を持ていいんだよ」教育は、君たちの価値観はどれも間違っていないから、別の価値観を持つ人にそれを主張しちゃだめで、自分の価値観が共有される中（究極的には自分のみ）で閉じておいてね、ということまで含意された教育である。また、ここでは「真理に対する対等な権利」が前提されていないことも確認しておく。だからこの空間においては、自分の価値観が他人の価値観と食い違わない限りにおいて、すなわち「その通りですね。私もそう思います。」と言われる場合にしか自分の価値観を表明しようとはしないだろう。いや、この教育のもとではしてはいけないとさえ思うのではないか。それがまさしく「空気を読む」ということになる。

この「空気を読む」空間において醸成されるメンタリティーは、自分が持つ価値観がその空間とミスマッチしないような仕方でも過ごそうというものであるから、もし自分にとってはなんか違うなと思えた価値観が力をもったときには口をつぐみ、自分もその価値観と一致しているときには表明できる、という状態が生まれる。これが正解信仰の姿である。そこで人々が求めるのは、様々な考えを表明し、合意可能性を探るような探究のあり方ではなく（むしろそれはだめだと考えるはずである）、その空間にまるごと認めてもらえるような考えを表明することに躍起になるのだと思う。つまり、承認を得ることが第一の目的になり、いったい何が正しいのかということ、そして正面から問題に向き合い自分の考えを練り上げ主張する、なんてことは二の次三の次に、いや不要だとさえみなされる。さて問題は、この正解信仰のなかでもし承認を求めることから自由になろうとするなら、死でしかその自由は得られないのか、ということである。確認したように、正解信仰においては正しいとされる価値観からの承認がないよりも優先される目的である。そしてこの正解信仰の前提のもとでは、周りに合わないような価値観は表明してはいけないと要求してくるので、もし承認欲求から逃れ

るという意味で自由になるためには、そこから完全に離脱することでしか不可能だと思う。だから、突き詰めた先は死であるというのは、一理ある⁵。

否定してはいけないのは、他人の価値観のみならず、校則や法律といった所属集団のルールをもであり、さらには明文化されていない空気に対しても異議をさしはさんではいけないという意識が浸透している。空気を読み、それに合わせていくことが何より大事なのである。行き着く先は広い意味での権威主義である。広い意味でその時その場で力をもっているものには合わせなければならず、公的な場面では実は多様性は認められないという反転が密かに惹き起こされており、「多様性の尊重」教育は、皮肉なことに、多様性が説かれることがなかった以前の日本社会にも増して、むしろ多様性が社会に台頭しないように抑制する効果をもたらしめているのである。

自由主義の自由は、もちろん特定の個人の自由のみを絶対視するものではなく、人間に平等に自由を認めるものである。したがって、多数の人間がいる以上、実際には各人が何でも自由にできるわけではなく、他人の自由を尊重するために自分の自由が制限されること自体は、自由に反するわけではないように思われる（ただし、この理解についても後で問題にする）。しかし、上の学生たちが指摘した状況は、単に自分のしたいことが完全には実現できないといった制限の実態ではなく、そもそも他人の意向に対して臆することなく自分の意志を表明するということ自体が禁止される状況である。それも、他人に禁止されたからというよりも、みずからが自己規制をかける形で自粛されるのである。そして、表明できない価値観は取るに足らないものであると、みずから卑下することにつながる。これが、「多様な価値観」の尊重が惹き起こした事態であるとすれば、極めていびつな状況と言わざるをえない。確かに選んでいるのは本人であり、形式上は自由選択が実現しているが、選ばれた内容は本人が多数派や権力者に抗してでも主張したいものではなく、むしろ多数派や権力におもねるものなのである。それでも、ここには自由があると言ってよいのだろうか。

私は、正解信仰のもとに教育された者の結末に関して彼女の言っていることはもっともであると考えている。理由は以下のとおりである。現代の学校はどのような子供たちを作ろうとしているのか……私は間違いを恐れ、「発言すること」に消極的である……それは言い換えれば、答えを知らないから答えないということだ。そしてそれを更に言い換えれば、答えを知っていればそれをあたかも自分で考えたかのように自信をもって発言することができるということだ。小学校から高校までの12年間を振り返ると、私の周りには私のような、発言に消極的な人で溢れていたように思える。つまり、現代の学校は、子供に考える力を与えようとしていない。従って、安易に「死でしか自由は得られない」という思いに子供たちが至ってしまう可能性は大いにあり得る。考えることによって自由になれることを知らないからだ。これらのことから現代の学校は、考える力を持たない、すなわち自分の言葉を持たない子供たちを作ろうとしていると言える⁶。

⁵ 2019年7月9日「哲学特講」に対する学生H.S.のリアクションより。

⁶ 2019年5月7日「哲学通論」に対する学生H.I.のリアクションより。

それぞれが持つ価値観を手放しに正しいとし、それに対して疑問を持ったり間違いだと考えたりしてはいけないということばかり強調し、これは結局のところ、真理を追い求めたり、それ間違いだと指摘することを否定する。すると、「私はこれが正しいと思う」と主張できるのは、周りがそれを同じように「正しい」と共感してくれるときだけ⁷

意見を「私の」意見として堂々と発言できるのは、それが「まわりに承認される」と確信できたときだけであるとは、何とも皮肉な事態であるが、現在の教室での発言状況を理解するための極めて適切なヒントであるように思われる。「自分の意見を言ってください」と問いかけても発言は少なく、むしろ自分の意見とは関係ないことのほうが発言は出やすい。本来であれば、自分の意見は自分の意見なのだから、誰でもいつでも言えるはずで、むしろ、客観的な知識は知っていなければ答えられないので、それについての発言の方が難しいはずである。しかし、現代の日本の若者にとって、「自分の」意見として「公言」してよいことは、まわりや権力者の承認を得られることだけなのである。それを見いだすのは簡単ではなく、よって「自分の」意見は言えなくなる。こうした「自分の」意見を本当に「自分の」意見と言ってよいのだろうか。

もちろん、「空気」を読んだり、「和」を乱さないようにすることは、日本では昔から尊重されてきたことである。しかし、そうしたときに取り立てて「自分の」「自由な」意見を言っているとは言わなかったであろう。自由主義の台頭とともに「個人の」「自由な」意見が重視されながら、実は「空気」に吸収されているという極めていびつな状況を「多様な価値観」教育が惹き起こしているのである。

2 「空気」の変容

対立を避け、和を大事にしてきた日本の文化は確かに社会とそこに属する人にとって有益な面もあったと思う。「空気」を読むことも集団としてやってゆくためには極めて重要なことである。では、わが国においては「個人の意見」や「自由」が「空気」に吸収されていることを前向きにとらえることもできるのだろうか。まず、この点を検討しておきたい。その際、空気ないし集団の機能が変容してきていることを看過してはいけない。以下のような学生の指摘もある。

確かに、共同体においても、正解信仰の社会においても、普遍的な真理を求めているわけではないという点で同じように、「正解」を信仰しているのだといえるかもしれない。しかし、やはり共同体と正解信仰の社会の正解に対する態度は違うと思う。共同体では、正解は求めるものではない。正解は流動的ではないから、正解の中で育った私は最初から、その共同体における正解を知っている。誰かの正解に合わせるのではなく、私の意見が当然のように正解なのだ。対し、正解信仰の社会ではそのような

⁷ 2019年7月9日「哲学特講」に対する学生 A.N. のリアクションより。

過程で正解を信じるに至ったわけではない。最初から正解は流動的で、その時々で変化する。だから1つの正解を盲信し、自分の基盤にすることはできない。正解は変わって当たり前だから、自分の意見を変えることにも抵抗が無いのだろう……先日の「人を殺してはいけない」という命題でも、普段はそう思って暮らしているはずなのに、いざ考えてみるとそうでもない、と簡単に言えてしまう人がいる。本来、自分が信じていたことを疑わなくてはならない事態が起きたらひどくショックを受けるはずだ。そして、そんなはずはないのに何故、と考えるのが自然だと思う。しかしそれが無いということは、その意見を信じているわけではないのと同時に、“正解 = 1つの価値観”ではない社会で生きてきたからこそその考え方なのではないかと思った。つまり、どちらの社会も正解を信仰しているとはいえる。しかし、“正解 = 1つ”である社会と“正解は流動的”な社会では、私達の正解への態度は全く違うものになるのだ。だから後者の社会では権威ある正解を求め続けるという意味での正解信仰があるが前者はそうではない⁸。

筆者は再三にわたって真理そのものは一つであることを強調してきたが、あまり異質な価値観に触れる機会のなかった昔の共同体においては、確かにその共同体における正解は

⁸ 2019年5月14日「哲学通論」に対する学生M.I.のリアクションより。もちろん、昔の共同体も一枚岩ではなく、なかにはそこでの価値観に疑問をもつ者もいたであろう。しかし、主流となる価値が明白で不動なものである場合、現代の流動的な空気の中に置かれた若者たちとは少し異なった事情があったと思われる。次のリアクションはその点に踏み込んでいる。「かつての日本であっても、世間の主流派に反する者は仲間外れにされ、社会的な死を与えられることはあったのだと思う。例えば、戦争に否定的な者を非国民とみなしたり、積極的に社会参加する女性を女のくせに生意気だと叩いたり。しかし当時は、「戦争は良いことだ」、「女は男より控えめに生きるべきだ」というように、何が正しいかがはっきりと明示されていた。その明示された真理に対し、従うか（その真理を信じて、それに反しないように生きるか）従わないか（その真理は間違いだし、仲間外れにされようとも、それとは異なる真理を信じて生きていくか）の二択だった。しかし今の日本では、真理を明示して二択を迫ることは禁止され、それぞれの価値観が尊重されるようになった。この、「それぞれの価値観を尊重する」というのは、どんな考えも否定せず、どんな考えにも正解はないとすることだと多くの人に解釈されている。どんな考えであっても、「それは間違いだ！」と否定してはいけないし、正しいという判断を下してもいけない。すべての価値観を尊重せねばいけないのだから、すべての考えはデリケートに扱わねばならず、正しい間違いの判断を下して傷つけてはならないのである。つまり、「それぞれの価値観を尊重する」というのは、正しい間違いの判断をしない状態、要するに真理を無視する状態を目指しているのではないかと思う。しかし、学校のクラスや会社で考えを一つにまとめなければいけないときが必ず出てくる。全ての価値観を尊重するといっても、どこかで必ずバラバラな個々人をまとめなければならない。そういうときにどうするか。真理を無視することが望ましいのだから、正しい間違いで判断することは不適切であり、代わりの判断基準が必要となる。その判断基準こそが承認である。正しいかどうかの判断が避けられ、人の同意や共感を得られることに目が向けられるとなれば、生きていく上で必要とされるのは、自分の属しているクラス、サークル…など、自分にとって必要なコミュニティ内で承認されることである。もはや正しいかどうかには意味はない。どんなに論理的で筋の通った考えも、それが認められなければ何の意味もないのである。こう考えていくと、そのコミュニティで自分が認められない場合、まるで自分に価値がないかのような気持ちになり、それが原因で死を選ぶ人も出てくる」（2019年7月9日「哲学特講」に対する学生A.T.のリアクションより）。

〈対話〉によって見いだされるものではないが、唯一のものだと思われており、また、各人に自明視されて主体的にも引き受けられていたので、ほとんど唯一の真理のような機能を果たしていたと言うこともできる。確かに以前から「空気を読む」ということは日本社会の特徴であるが、それは価値が明文化されていないということであって、現代の若者が対峙しているほどの流動性はそこにはなかったと思われる。「世間」が機能していた時代には、柔軟さをもちながらも不動と言えるような価値観が(暗黙の了解であることも多かったかもしれないが)君臨できていたように思われるのである。

鴻上尚史は、若者が対峙している現代の「空気」は「世間」が流動化したものであると言う。「世間」は壊れてきているが、それを補完する形で「空気を読む」ことが過剰に要求されるようになってきたというのである。こうした中で窒息せずに生き延びるコツとして、鴻上氏は、そうした空気(世間)を利用し、複数の共同体にゆるやかに所属することを提案している⁹。この方策は有効であろうか。次の学生は、その問題点を鋭く指摘する。

自分の支えになっているものが、世間であれ神であれ、それ一つしかなく、それゆえ強制力と必然性を持つ、ということが最も重要な点だと思う。自分を支える共同体を自分で選ぶことができるということは、その共同体はその人にとって偶然的である。それに対して、世間や神は単数であり、そしてそういう環境に生まれ落ちた以上、強制的に従属させられるものであり、その世間に属さなかったことが、その神を信じていなかったことがありえない。これは、例えば、現に生まれ生きている子どもにとって、(良かれ悪しかれ)自分の両親でない人から生まれることがありえなかった(その両親から生まれなかったのなら自分は自分ではありえない)ことと類比的に考えられるだろう。世間にしろ神にしろ、現に生きている自分にとってそれ一つしかなく、強制的にそこに生きるほかなく、そこに生まれ落ちなかったことがありえない、この絶対的などうしようもなさ、一方で自分を苦しめることもあるが、他方で絶対的で安定した支えともなる。鴻上さんの提案は、このどうしようもなさを考慮に入っていない点で致命的な問題を抱えていると私は思う¹⁰。

現代の空気社会の一番の問題点は、それが流動的であるという点である。流動的であるが故に、そこに示された価値を自分のものとして引き受け、責任をもって遵守してゆくということができない。規範が規範として機能するためには拘束性が必要である。しかし、空気に付き従う人間にとって拘束力をもっている価値とは、そこそこで提示された価値に固執せず、情勢を見て次々と価値観を渡り歩くべきだという形式的な作法がもつ価値だけである。そうすると、こうした人は主体的には空虚であり、いつもみずからが従属すべき価値を探し続けなければならない。もちろん、そうした人も自己利益を重視するといった不動の価値観は持ちあわせているだろう。しかし、損得や生活の安寧を超えた何らかの価値観を主体的に引き受けることなしに、人は本当に充実した人生を送れるのであろうか。鴻上さんは、実はこの損得や安寧を超えた価値観を何らかの形で既に自分のものとしてい

⁹ 鴻上尚史『「空気」と「世間」』講談社現代新書、2006年。

¹⁰ 2019年7月23日「哲学特講」に対する学生K.S.のリアクションより。

るように思われる。そうした価値によって自己拘束できる境地に数々の幸運から既に達しているのである。だから、複数の共同体を渡り歩いても、自分を見失うことなく、尊厳をもって生きてゆける。いわゆる「自己決定・自己責任」といった価値を本気で責任をもって引き受けられる人たちは概ね、その背後にこうした価値観を隠し持っている（本人が自覚しているか否かにかかわらず）と筆者は睨んでいる。しかし、そういう前提はすべての人に期待できるわけではないのである。もはや日本においても、空気に盲目的につき従う生き方は危険である。第1節で取り上げたグレゴリー・クラークが賛美したような理想的な日本社会はもはやない。日本人も思想をもち、それを批判的に吟味する生き方を避けるわけにはゆかないだろう。

ところで、一般に従属は自由ではない。空気に付き従う場合、従属することを選んでるのは当人であるが、他者の承認に依存した選択を自由と呼ぶことに問題はないのだろうか。この点を検討したい。

3 自由と責任

第1節で、「自由」になるには死を選択するしかないのではないか、という問題提起を取り上げた。そこで想定されていた「自由」とはどのようなものであろうか。

いま現在世間で言われる自由というのは、……自分の思想が侵されることがなくありのままの自分が認められるという意味での自由である。実際私が受けてきた小学校での教育はこの自由に基づいた指導方針だったように思う。……その現場は極めて相対主義的な価値観が支持されており、個人の持つ思想はその人がそう思ったというだけで反論できなくなるような空気感が支配していた。自分が正しいと思うことを言ったら対立が起きると、それを発言した人間はあたかも他者を傷つける悪人かのように扱われた。（いくら君の言うことが正しくても他者の思想に干渉するのは望ましくないとまで言われた。）この考えを社会で全面的に認める問題点は、今まさに言及したような点にあると思う。つまり、そこでは建前上どんな考えを持つことも認められるとは言えないものの、それを正しいと表明することへのハードルは極めて高い。それでは自ら主体的に考えて物事の真実に迫っていくことなどできないだろう。さらに他者に干渉しないことが自由を保障することとされたならば、それは自分の中で閉じて孤独になっていくということでもあると感じた¹¹。

¹¹ 2019年5月28日「哲学通論」に対する学生 K. I. のリアクションより。「いくら君の言うことが正しくても他者の思想に干渉するのは望ましくないと」は、本稿を読んできた者にとっては凄まじく違和感を与えるセリフであるが、わが国ではありふれた言論である。「小学校の頃、意見の対立が原因で喧嘩をしている同級の生徒たちがいた。仲裁に來た担任は彼らに「人それぞれ意見が違うのは当たり前だから、相手が自分の意見と違うからと言ってそれを否定するのはいけないよ」と言っていたことを思い出した。その言葉を耳にした当時の私は、その言葉を疑うこともせずただ素直に受け入れていた。しかし、もし先生が多様な意見の尊重を考えた上でそのような発言をしたというなら、それは誤りであると、今はそう考えることができる。なぜなら、真に他者を尊重するとは、積極的に他者と関わっていくことが肝要

何を考えても、それがそのまま認められるのが「自由」であると思われる節がある。しかし、こういう「自由」概念では、人はみな欲求不満に陥らざるをえない。なぜなら、他者の自由も尊重しなければいけないので、自分の思いは文字通りそのまま認められることはないからである。それどころか、既に見たように、「自分の」意見をみなに承認してもらえるものへと変容させていかなければならない。到底、この意味での「自由」の実現ははなから不可能なのである。

意見（または思想、信条）とは考える人の数だけ存在するのは確かだろう。それが正解信仰の普及した現代の場合、以下の二つの場合でしか自由と言えないと考える。

①自分自身の意見が正解とされる場合

②①以外の場合において意見が自分自身の中にとどまっている場合

少しでも自身から飛び出て人に認識された意見というのは正解信仰の中では、真偽に振り分けられてしまう。真であれば問題はないが偽と言われてしまったということは自身を否定され、承認を獲得できない（＝居場所がない）ということと同じことであり、自由とは言えなくなる。……そうして出てきた自由が、自分の意見は自分のうちに潜め、否定されることを回避するという者ではないだろうか。もしかしたら自分を全肯定してくれる者がいるという可能性を捨てずに生きていくのである¹²。

だからだ。様々な意見を否定することなく、「このような意見もあるのだ」とただ受け入れる態度は、言い換えれば他者の意見を理解しようとしてもしていない態度だ。その点でいえば、担任よりも生徒たちのほうが真理に近づいていたのかも知れない」（2019年5月7日「哲学通論」に対する学生 H. I. のアサインメントより）。「『自分の信条が他人に干渉されない』という自由はよく見かける。そもそも「多様性」という言葉はとてつもなく便利である。持ち出せば自分の価値観・信条を相手から守ることが出来、相手のものも同じく侵さずに済むからである。SNS を見ているとこんな言葉をよく見る。（特に何かしらの人命に関わる事故についての考察の場において）『価値観を押し付けなさい』僕はこれを始めてみた時何を言っているのかわからなかった。『日本人は価値観を押し付けたがる』という言葉も見た。これに至っては愚かさを感じた。対話を行う場合、自分の価値観・信条を明確にし相手に伝えることが必要だと思うからだ。その行為を『価値観の押しつけ』と呼ぶのはどうかと思う。（行き過ぎて相手を無理やり自分の考えと同じにさせることはいけないことだが）すなわち今現在人々は対話放棄したり忘れたりしているのではなく嫌っているという言い方の方がより真理に近いと思う。今こそあやふやになった自由の定義をもう一度問い直すべきなのである」（2019年5月28日「哲学通論」に対する学生 K. Y. のリアクションより）。「自分も実際にネット上で『自分の価値観を押し付けるな』という書き込みを見たことがある。まるで、『それぞれ価値観が違っていいのだから、他人の価値観を否定してはいけない。自分の価値観が否定されることもない。だから何をしてもいい』と言っているように見えた。このような発言はネット上の様々な場面で見られる。先日も、ネット上で意見の言い合いのようになっていた場面で、ある人が『人それぞれの意見があるから自分の意見を押し付けちゃだめだよ』と言っていて、まるでそれが一番まともな発言であるかのようになっていた。思想の自由を誤解している人が本当にたくさんいるということを改めて実感した。また、自分も頭では思想の自由や対話の必要性について理解してるつもりだが、実際にあまり対話を行えていないとは思えないので、これからも対話に対する姿勢を変えなければあらなと思った」（2019年6月4日「哲学通論」に対する学生 R. K. のリアクションより）。

¹² 2019年5月28日「哲学通論」に対する学生 M. H. のリアクションより。

しかし、表明しないことによって守る「自由」(の可能性)とは、西洋発の元々の「自由」とは似ても似つかぬものである。当然、筆者が再三説いてきた「思想の自由」とは真逆のものである。「思想の自由」においては、基本的には、むしろ公表の義務があるのであり、公表しない自由すら認められない¹³。

さらに現代の(特にわが国の)「自由」概念の特徴は、社会的「責任」から切り離される傾向をもつ点にある。

今主流となっている自由の考え方は誰からも否定されずまた自由の責任も取りたくはないということだと私は思う。自身の信条や行動について誰からも干渉されずまた否定的な言葉に傷つけられない上に、その結果生まれた不利益や他者への侵害に対しても責任を取りたくない、殻にこもっていることこそが自由であると考え人が多いように思える。……「自分の信条が全く他に干渉されないということ」「自分が自分のままで認められること」の問題点は共通してその言動の責任を誰も負わないことだ。自分の信条が全く他に干渉されないということはその信条に対し自身が責任を持つかのように聞こえるが、現在の日本の教育はそもそも個々が信条を持つことを推奨していない。多様性を尊重すると教育しながらその根幹にある各人の信条を考えさせることも語らせることもそれを通じて対話させることもしない。なぜなら全員に共通した信条に近い洗脳を施しその必要がないよう意識的無意識的問わず教育するからだ。結果、自由と同様ふわっとした正義観倫理観を画一的にあげ、そこから外れるものを対話を抜きに正解ではないと決めつけるのだ。またこの教育の1番の弊害は、当然他者と対話しないため、仮にその倫理観と矛盾する出来事に会ってもはじめから自身の信条なんて存在しなかったように「そうかもしれない」「そういう考えもある」と言いだしすぐに染まることだ¹⁴。

「価値観は人それぞれ」とは言われたけれども、「その価値観に責任を持て」と言われたことはないという報告も続出している。

確かに私も今まで、「価値観は人それぞれある」と何回も言われてきたが、「その価値観に責任を持て」といわれた記憶はない。それどころか、私は今まで自分を根底から崩す価値観を探し、自分の一定した価値観を持ったことがなかった。それぞれ価値観を持つことはいいと言いつつ、皆が同じ権威の元に同じような価値観を持っていた。……おそらく、個人が思想や価値観に「責任」を持つとは、他人の価値観、思想を尊重し、「そういう考え方もあるよね、だからそういうことをしても仕方ないよね」と思うのではなく、その人の考えにある誤解を自分の考えに重ねて解いていくという姿勢だと思う¹⁵。

¹³ 「対話と真理」38頁以下、「トラシュマコスの呪縛」24頁ほかを参照。

¹⁴ 2019年5月28日「哲学通論」に対する学生M.O.のリアクションより。

¹⁵ 2019年5月7日「哲学通論」に対する学生I.O.のリアクションより。

「価値観に責任を持て」という考えについて私もこれまで教わることはなかった。対話を実現しようとする、生徒が対話を通して自分の考えを深め、教師も自分の中に確固たる真理をもって生徒たちの意見に対峙することが必要となるので、教師の負担が増加し、生徒を統制しづらくなるのではないかと思った。実際、私が中学生の時も道徳の授業で道徳的問いについて考える時、級友と話し合いをしつつも先生がいつか正解を教えてくれるだろうと考えていた。先生も教科書や慣習で定められたルール等の権威に従って答えを決めていたと思うので、自らの意見に責任を誰も持たずにただ正解を求めるだけの無意味な時間だったと感じる¹⁶。

「価値観は人それぞれ」という言葉は私もさんざん聞いてきたが、私もまた自分の価値観に責任を持つことを勧められたことはなかった。これは多様な価値観の積極的な容認を目指そうとしているものというより、むしろ価値観の対立を避けようとする消極的な方便でしかなかったのだろうと考えた。そしてこの根底には、やはり強大な権力に支えられた価値観に逆らうことなく、自ら従うことが良しとする思想があるのだろう¹⁷。

自由主義の自由は一応「自己責任」という責任を理論上は伴っている。自分で決定したことだからこそ納得して責任ももてるはずだと、「自己決定・自己責任」こそがモラルを向上させるという理屈が唱えられる。しかし、現実には、どうすれば責任から逃れられるかに躍起になっている姿をよく見かける。さらに言えば、兵役そのほかの、誰かがやらねばならないが、誰もやりたくはない類の仕事があり、こうした「社会的責任」を「自己責任」でカバーすることには無理があるという指摘もある。

わが国では、自由主義の体制をとりながらも、そもそも自己責任自体が日常では徹底されることは少ない（弱いもののいじめに使われるとき以外は）。自由主義という考え方自体にも、はたしてそれは本当に責任ある社会を構築できるのかという問題が内包されていると思われるが、わが国においては、そもそも通常は（人を切るとき以外は）個人に責任はもたせてもらえないという昔からの伝統が維持されているのである。これは、誰も落伍者を出さずに共同体を充実させてゆく知恵でもあったのだが、「価値観は人それぞれ」と言いながら、いまだにその価値観に責任をもたせようと努めてないのであれば、そもそも自由主義の採用自体が見せかけのものにすぎないとも言えよう。

しかし、自由主義が自己責任が徹底されれば、人が本当に「自由」になれるかどうかにも疑問がある。

「価値の共有」という前提は、〈対話〉にとって不可欠なものである。さまざまなリアクションを読んで、確かに鴻上さんの提案では、誰もが対話への姿勢を獲得できるわけではないと思った。価値の共有の困難という問題は、自由主義にも共通するものである。多様性の根底にも、共有される価値の存在が必要である。世間の所与性につい

¹⁶ 2019年5月14日「哲学通論」に対する学生S.T.のリアクションより。

¹⁷ 2019年5月14日「哲学通論」に対する学生K.K.のリアクションより。

て、自分はネガティブに捉えていた。そこには「強制＝悪」という前提があったと思う。しかし、一つしかない「閉じた共同体」だからこそ持ち得る強い連帯や拘束性が人々を価値の共有に駆り立てる大きな原動力となる、という話を聞いて少し考えが変わった。自己を拘束できる力がない人間にとっては、価値共有のための何らかの拘束力というものも必要なかもしれない¹⁸。

私は人間にとって一番大事な「自由」は、一連の拙稿で論じてきた「思想の自由」であると思っている。この自由にとっては実は、その思想で表現されている価値観の内容を思いついたのが、思想を唱える本人であるかどうかは重要ではない。

おそらく、自分の思想や価値観に独自性や個性を求めることで、そこに承認欲求が絡んでしまうのだと思う。自分が真理だと思うことは何も全く新しいものであったり独創的なものである必要はない。ただ周りの意見を鵜呑みにするのではなく自ら考え、人と共有できるよう対話した結果であれば、それがたとえ既存のものであったとしても十分に意味はあるし、その人だからできたことだと言って良いのではないだろうか¹⁹。

「思想の自由」にとって最も重要なことは、他人と共有できる価値を見つけ（これは自分のオリジナルでなくてもよい）、その価値を、決して人のせいにならずに、みずからの責任で引き受けられるという点である。

今日の授業で、自由とはどのようなものか少しは掘めたと思う。強制の有無は自由の本質とは直接関係しない。私たちは生まれる時代や社会を選ぶことはできない。生活のそれぞれの状況は与えられたものであり、制限を完全になくすることはできない。大事なものは強制をなくすることではない。与えられた環境の中で、いかに「本当の私」の声に素直に行動出来るかだと思う。これだけは譲れないと自分が前提していることをいかに貫くことができるかということが大切なのだと思う。その場その場でどのように行動するべきか、内発的な義務感に駆り立てられて行動できることが、自由であるということなのだと感じた。たとえ誰かに言われたことであっても、心から納得して、そうすべきだということを自分の立場として取り込むことができるのなら、それもまた自由であるといえる。自由と、自分の主張に責任を持つことは同義だ。人間はそんなに綺麗な生き物ではないと思う。どれだけ理想を实践して生きたいと思っても、全てを实践することはどうしてもできない。そういう側面もあるということを認めなくてはならない。それは、諦めるのでもないし、卑屈になるのとも違う。あるがままを認めるというようなことだと思う。言葉では簡単に言えるが、自分の中でうまく折り合いをつけることができない。私にとっての直近の課題はこの部分であると感じている²⁰。

¹⁸ 2019年7月30日「哲学特講」に対する学生Y.S.のリアクションより。

¹⁹ 2019年8月6日「哲学特講」に対する学生A.S.のリアクションより。

²⁰ 2018年2月5日「哲学通論」に対する学生K.H.のリアクションより。

おわりに

「多様性」を叫ぶことによって確かに障害者等の公的に承認された少数者には有利な状況がもたらされることもあると思われる²¹。また、国家等によって或る特定の価値観に統制され著しい抑圧が生じている現場で「多様性」を叫ぶことには意義があるであろう。しかし、「多様性」を叫ぶことが、互いの利害調整を超えて共有できる唯一の価値の存在そのものの否定につながる場合（これは、西洋哲学的には「理性」の存在の否定とも表現されよう）、皮肉にも、みずからの価値観を公的に表明することを抑制し、権力におもねる集団を生みだすことになる²²。このような社会においては、権力の体現として以外の機能をもつ道徳や倫理は消失する。これが本当に多様な価値観の尊重なのだろうか。私は違うと思う。では、真の意味で多様性を尊重するにはどうすればよいのか。以下の学生のコメントが参考になる。

²¹ 公的に承認されない弱者の問題については、かつて論じたことがある。拙稿「公認されない「弱者」」(『ぷらくしす』2000年秋号)。

²² 草稿を見ていただいた方から、「学校で具体的にどんなことで相対主義が説かれているのか。具体例が欲しい」と指摘をいただいたので、学生たちに問い合わせたところ、特定のぴったりの具体例が挙げられることはなく、「言葉としてはっきり教師から生徒へ伝えられていくものではなく、ゆっくりと「刷り込まれていく」ものである」(2019年11月12日「哲学通論」に対する学生 K. Y. のアサインメントより)という応答すらももらった。明確な思想として教えられているものではなく、日々の学校生活の中で生徒たちのうちに形成されてきた解釈であり、あえて言語化すると、本稿で紹介したような思想になるというのである。

こうした解釈が形成されてゆく要因として挙げられたのは、とにかく筆者が言ってきたような〈対話〉に触れる機会がなかったということである。「社会や国語の授業では意見を出すだけ出して終わりだった。もちろん、メリットデメリットを出すなどいくらでも言えるものはそれでも良いが、自分の意見を言う系の授業で、その後話し合いをした覚えはない。言うだけ言って、他の人の意見も聞いただけ聞いて、先生が模範解答を出して終わりだった。……私は心から人は分かり合えない、対話に意味が無いと思っていたわけでは無いのに相対主義の意見を疑問無く受け入れていたのは、そもそも議論の機会が無かったからなのではないかと思った」(同上学生 M. I. のアサインメントより)。価値観の違いが問題にされるとしても、「楽しいと思うこととか嬉しいと思うこととか悲しいと思うことは人によって違う」みたいに、感情に関わる差しさわりのないことが多かったような気がする。あまり社会問題への意見的な内容には触れていなかった」(同上学生 R. O. のアサインメントより)という学生の言葉からもわかるように、できるだけ決着をつける必要がないような問題提起がなされるので、〈対話〉には結びつかなかったのである。

それどころか、積極的に〈対話〉を避けようとしていた教師もいるようである。「孟子の性善説と荀子の性悪説を学び、自分はどちらだと思うか班で話し合いをすることがあった。先生は話し合いの前に、まだ対立も生じておらず誰の意見も否定されていないのに「正解はないよ、考え方は人それぞれだよ」というようなことを言い、私も何の疑問もなくわかってますよという気持ちでその言葉を受け止めていた。当時は「人それぞれ」が結局どんな意見よりも正しいことだと思っていた。班の中で意見が対立してもそれが当たり前であるから「私はこう思うけどあなたはそう思うんだ。でもまあ人それぞれだから。」が全てであり、最終的には先生が黒板に書く「正解」をノートに書き写す。そういう作業を繰り返していた。今思えばあれほど無意味な時間はないように思う」(同上学生 H. K. のアサインメントより)。「小学校の道徳の授業の中で、与えられた教材を読んだ後に「正解はないから自由に考えていいんだよ。」と言われ、紙に思ったこと・感じたことを書いて提出する流れがあったことを記憶している。感想を書か

せること自体は良いのだが、そこに教員が何かコメントを返したり他者と意見交換をしたりといった光景はなかったのだ。教員自体も、生徒を否定しないことを意識しすぎて、肝心の生徒とのやり取りがほとんど見られなくなってしまっていたと考えられ、また「生徒は感想を書くだけで自分の世界を広げ成長していく。その中で他者と関わりとせうかくの貴重な個人の価値観が変わってしまう恐れがある。」という……考えが見られる」(同上学生 K. Y. のアサインメントより)。この最後の考え方は、以前に私が或る総合科目のリアクションで出くわし、〈対話〉と真理について考え始めるきっかけとなったリアクション：「自分の中に大事な真理があるかもしれないのに、〈対話〉なんかしたら、その真理が失われてしまいかねない」と軌を一にするものであるように思われる。

本稿第1節の問題提起をした卒業生は、相対主義が形成されてきた背景として、「〔価値観が話し合うことで変容する〕とか「正しさを求めて、互いの価値観を摺り合わせる」という発想がなかったのではないのでしょうか。そもそも、「自分の価値観とは固有で不変のもの」であり、「正しさとは話し合って決めるものではなく、そのときの空気感で予め決まっているものだ」という感覚だったように思います。その根底にあるのは、「自分は〈正解〉にアクセスすることはできても〈正解〉そのものを変容させることはできない」という認識です」とコメントし、「自分の価値観」と「正しさ」との乖離を示唆する。自分の価値観も他人の価値観も変わりうること、それらが力に関係なく、正しさとなり、既存の正しさを変容させることができるという発想を多くの教師は教えてきていない。それどころか、生徒が正しさを追求することを抑制する傾向がある。とくに、生徒間でいさか이가あったときに、その傾向は顕著になる。「学校での具体的な体験を思い出せなかったので、正義の問題とはずれてしまうが自分の1つの体験を述べる。私がある同級生と喧嘩したとき、仲裁に入った先生が言ったセリフである。その先生は、「人それぞれ不快に感じることは違うのだから、相手が不快だと感じたら自分が共感できなくても謝るべきである」といった内容であった。当時私はこれに違和感を覚えた。というのも、このとき相手がなぜ私の行為を不快に思ったのかを知ることすらダメだったからである。相互理解より衝突回避を優先しているのは相対主義教育に通じると感じた」(同上学生 A. H. のアサインメントより)。

こうしたことが積み重なって、学生たちの相対主義的なものの見方が形成されてきたのであろう。今必要なことは、生徒や学生たちに「当事者」意識をもって「自分の価値観を正しさと真理に重ねる」ことを強いることであるように思われる。そのためには、教師や大人たちも「当事者」意識をもって同じことに取り組まねばならない。中立ではだめである。ディベートではだめである。「どう考えても片方の立場こそが正しいと思ってもその心情を殺して反対側からの意見を書けと要求される、しかもそれが何かの試験であれば上手く書かないと評価に影響する、そもそも授業や試験のために当を得た意見を組み立てて表明するのみで実際にそう考えているかはほとんど無関係、そのことが非常に苦しかったことがある。これは本当に上手く取り入れられない限り、形こそ意見と意見とを対立させてより正しいものを探り合うものではあれど、実際には意見そのものの各々の態度を完全に無視させる経験になっているのではないか。自身の信条と反対の意見でも考えさせるのはおそらく「一つの考え方に固執せず柔軟に考えよう」という趣旨だと思うのだが、その結果として本当に正しい考え方が何なのかの結論を出すことは求められなかったように思う。むしろ授業時であれば、いろんな意見があるから唯一の結論は出ないんだよ、という空気にさえなっていた」(同上学生 N. S. のアサインメントより)。他者と責任をもって対立する〈対話〉は、必ずしも楽しく楽な道ではないが、それを避けては以下のような事態は改善されないであろう。「すぐには答えてない問題について考える時に相対主義が説かれていたと思う。そのような問題を考える時というのは大体が総合や道徳の授業内で行われるもので、授業の外で友達と話す際の話題の種には上がらなかった。……生徒たちは自分の問題として真に受け止めていない。生徒たちはそのような問題をただ授業の中で扱われただけの問題として捉えているために、授業が終わればその問題は過ぎた問題として処理してしまう。納得できるかできないかの次元に至るまで考えていない」(同上学生 H. I. のアサインメントより)。

価値観は人それぞれ違っていいというものではない（少なくとも、今ここで使われている意味においては）。「私はこうするけど、あなたはしなくてもいいよ」というのは趣味や嗜好の範囲の話であり、〔今問題にしている〕価値観はそれらとは違って「全ての人がこうするべきだ」という他人に対する強制力を含んでいる。それは自分勝手な理由からではなく、自分の価値観が真理と一致していると信じているからである。しかし、それが本当に合っているかは誰にも分からない。一致しているのは他の人の価値観とかもしれないし、誰のものとも一致していないかもしれない。したがって、本来なら「それぞれ価値観を持っていい」ではなく「誰の価値観も真理と一致している可能性がありうる」、そして「不当な理由（学歴が低いとか賛同する人が少ない等）によってその価値観が真理ではないと否定されてはならない」というように教育されるべきである。しかし、「価値観は人それぞれ」と教えられ、唯一絶対の真理があるとは信じられない人にとって、自分の価値観を根拠付けられるものは何もない。ゆえに、権威のあるものに同調し、人々からの承認を求める……真理の実在を信じられないまま、権威や承認欲求から逃れようとするならば、たしかに自由を得るためには「死」しかないと思う。だが、「死」を選ぶのではなく、権威や他人からの承認なしに自分の価値観を信じるということができると私は思う（それにはやはり、真理があると信じていることが必要になると思うが）。相手が自分のことを「真理になり得る価値観を持つ人間」と思って対等に接してくれれば、たとえ自分の価値観が承認されなかったとしても生きていくことができるのではないだろうか²³。

ただ単に価値観の多様性を説くことは、価値の共有ないし理解の可能性そのものを否定することにつながる。結果として、多様性を認めない社会が出現するのである²⁴。真の意味で多様性を尊重するためには、むしろ唯一の真理の存在を前提しなければならない。真理は唯一であるが、誰もがその真理に近づきうる。「それぞれで価値観を持っていいんだよ」

²³ 2019年7月9日「哲学特講」に対するA.S.のリアクションより。

²⁴ 「個性」という言葉の乱用に警鐘を鳴らす学生もいる。「ここ最近の個性信仰は、「みんなちがってみんないい」といった教育と密接に関連していると思う。みんな違ってみんないい、つまり普遍的真理は存在せず、その時々で正解を求めることでしか承認されない現状の中では、人々は正解に依存しない自分の価値の存在を信じるようになる。なぜなら正解を出せなくなった自分には価値がないのではないかと恐れるからだ。その「正解に依存しない自分の価値」こそが「個性」だと考える。それが真理に近づいているか、また正しいことであるかに関わらず、「自分には個性がある」と思えば、自分には他の人にとって代われない固有の価値があり、その価値は不可侵のまま、自分自身がなにもしなくても認めてもらえるということで心の安寧を得ることができる。このような「個性という幻想」が広まったのはある意味現代教育の必然といえるだろう。つまり、個性という概念は現代社会の病理を色濃く反映していると考えられる。……個の概念は人々が集団の中で自分を守るために生み出されたもので、それ単体で独立して存在することもないし、またそれが正解信仰に由来している以上、尊重されるべきものではない。個性を信仰することのもう一つの問題点は、「自分の考え」が個性として社会の中で尊重されることで、そのことに固執してしまう恐れがあることだ。「私の個性は侵害されるべきものではない」と批判されることを避けた結果、対話することが難しくなってしまう。行き過ぎた個性の尊重は、真理に真摯に向き合っていない意見に社会は目を背け、「個性」という名の下に放置しているだけだ」（2019年7月30日「哲学特講」に対するY.Y.のリアクションより）。

は、「それぞれが持つ価値観がそのまま認められる」という意味ではなく、基本的には「誰もが唯一の真理について提案する権利をもつ」という意味で理解されねばならない。このことが「思想の自由」である。提案はそのまま受け入れられるとはかぎらないが、慎重に取り扱われるべきであるという意味である。もちろん、人の経験、人が置かれている環境は様々であり、この唯一の真理は多様な表現形を呈する。だから直ちに唯一の真理が判明するなどということは、まずありえない。それでも、人々の間に見いだされる価値観の違いとそれに基づく対立の中には、本人自身が誤解や勘違いであったと自覚でき、同じ価値を共有できるようになるような違いもあるだろう。このような違いは〈対話〉によって違いそのものを解消してゆくのが望ましい。しかし、中には、その違いがその人の人生そのものと不可分に結びついており、その違いを安易に消し去ることなどできない場合もあるだろう。そうした場合には、なぜ違うのかを真の意味で「理解」する努力が求められるように思われる。ごまかしのない「理解」が成立するときには、その違いそのものは解消できなくとも、何らかの形で共有される場（唯一の真理）に接しているように思われるからである。自分が自明視している背景や前提を有意義に相対化してくれるのは、そのような場である。異質な価値に触れることは必ずしも気分のよいことではないかもしれないが、「不干涉」、「無関心」をつらぬくのではなく、積極的に関与し〈対話〉を試み、何らかの形で真の意味で「理解」することを怠らないことが、真の意味での「多様性の尊重」につながらると思うのである。

「不干涉」、「無関心」では真理を尊重できない。他人に誤解に気づいてもらうことも、自分の誤解に気づくこともできない。真に「多様な価値観」を尊重することもできないのである²⁵。

²⁵ 冒頭で問題提起をしてくれた卒業生からは以下のコメントをもらった。「真理に対する権利と責任を前提とせず、「多様な価値観を尊重しよう」と提唱すること。これを仮に「相対主義的発想」と呼ぶことにします。相対主義的発想において、「尊重」とは、分断と孤立を意味します。相手と関わらないこと以外に「尊重」する術はなく、「かけがえのなさ」や「人格」という考えから最も遠い。それが相対主義的発想であると考えます。なぜなら、相対主義的発想で唯一の真理を前提とせず、安易に「多様な価値観を尊重しよう」と提唱することは、「あなたがどんな意見を持っていても構わないよ。ただしあなたの意見を私の意見と同じ重さでは扱わないよ」と、相手に言い、また相手からも言われるということだからです。自分も相手も軽んじられており、「関わらないから、関係ないから排除の対象としない」という消極的な方法でしか「尊重」を示せません。自分中心ですが相手も相手中心なので、平行線で客観的には同様に軽いなか、重んじられているのは「強さ」です。もし誰かと対立してしまえば、より強い方（より利益をもたらすことができる、より権威のある、より多数に承認された方）が残り、弱い方は排除されます（飲み込まれる。なかったことにされる）。結局、誰のどんな意見もただの「1」。一見公平ですが、誰もが単なる頭数に過ぎず、軽く扱われているということです。ここでは、排除されないために、どれだけ自分を周り（多数）と対立させず、どれだけ自分が周り（多数）に承認されるかということに常に腐心することになります。それは、その場で認めてもらえそうな「正解」を述べるために、自分の感受性を無視してあらゆる言葉を飲み込み、発話するということです。どこまでも軽んじられ替えのきく頭数に過ぎない自分。そんな自分をかろうじてでも維持するためには、身近な他者からの絶え間ない承認が不可欠です。そして承認を得るためには、自分をどこまでも軽んじる必要があります。この行き詰まりから逃れ自由になるためには、もはや死しかないのではないのでしょうか。ここでは自由が、しがらみ

* 今回の文章は、問題提起からそれに対する応答まで、基本的に学生たちとの〈対話〉に導かれて構成されている。ここで取り上げなかったコメントも含めて、学生たちからたいへん多くのことを学んだ。特にリアクションの公開にて本稿をリードしてくれた学生たちには厚くお礼を申し上げたい。

からの解放（死）以上の意味を持てません。相対主義的発想においては、弱肉強食の法則に基づいた排除だけが、対立の解消手段です。ならば、排除せず、軽んじず、真に多様性を尊重するためには、唯一の真理を探究する対話が必要になってくるのだと思います」。

The problems of shouting “diversity” in Japanese education

Yoshishige HIGAKI

The purpose of this paper is to describe the problems with the Japanese education on the diverse “senses of values”. Praise of diversification in the sense of values not based on the search for the only truth brings rather the ruin of the worth which the diversity should have. It is because the worth of diversity which should be respected disappear by the plurality of values not based on the only truth. The diverse “senses of values” should be not immediately respected without any criticism. There are not many truths. There are various interpretations of the only truth. The diverse “senses of values” can be validated only based on the “dialogue” for the only truth.